

嘘つきの魔女と黒猫

蓮谷 慧

ハロウィーンの日だった。街は仮装をした人たちにぎわい、いつもにも増して活気にあふれている。私も例に漏れず、数人の友達と仮装をして街を練り歩いていた。憧れの魔女の仮装に身を包み、私が私でなくなっているようだった。

両目が隠れるくらいぶかぶかで、先の折れ曲がったとんがり帽子に、これまたサイズの大きいローブ。師匠に憧れた見習いの少女ともとれる姿だが、手に持っているごつごつとした杖が高貴さを物語っている。

街はオレンジや紫で彩られており、うまく雰囲気は溶け込んでいるようだ。一日限りで立っている屋台にも、ジャック・オー・ランタンをかたどったカゴが吊り下げられ、中にはチョコレートや飴が入っている。私たちはそこで買い物をしたり、時には小さい子にお菓子をあげたりして楽しんでいた。

夢と現実との狭間のような時間は、すぐに終わってしまう。日の光が赤く変わってきたころ、人混みはし

だいに少なくなり始めた。もうこんな時間になってしまったのかと、驚きと寂しさを感じながら、私たちは解散した。店じまいの最中に吹く冷たい風が、冬を予感させる。

私は、大きな買い物袋を結びつけた杖をつきながら、夕日の方へ向かっていた。大通りから路地に曲がるときに、前の方で声がした。なかなか渋い声だった。

「そこのお嬢ちゃん、ちよつといいかい」

立ち止まって目を凝らしても、建物に遮られて薄暗い道には人がいない。聞こえなかった振りをして、また歩き出すと、また聞こえた。

「お嬢ちゃん、まさか見えてないのかい？」

見回しても、やはり誰もいない。コンクリート造りの建物と、民家と、塀があり、そこに黒猫がちんまり座っているくらいだ。

「こんなに堂々としているのに、まさか見えてないなんてことはないだろう、なあ」

その声は、黒猫の辺りからするように聞こえた。

「——猫ちゃん？」

気が抜けてしまった声に、凜とした声で返事がくる。「まだお祭り気分か？——まあいいが」

黒猫は一呼吸おいた。

「ちよつとついできてくれ。わけは後で話す」

実際には初めて聞くような台詞に困惑と背徳感を抱きながら、私は黙って首を縦に振った。それを見ると、黒猫は微笑して、前に向き直った。私の方を振り返ることなく、すたすたと歩いていく。呆氣にとられていた私は、急いで黒猫の後をついていった。

細い路地を歩く。大通りとは対照的な、閑散とした住宅街。風が鳴る音、木の葉が擦れる音、道を踏む音が、そのまま耳に伝わってくる。

黒猫は路地をすいすい歩く。私が通れなさそうな道を避けて、迂回している風にも見えるし、わざと曲がる回数を増やして、道を覚えられないようにしている風にも見える。生憎記憶力はそこまで高い方ではないので、早々に道筋を覚えるのは諦めた。

いくらか経ったとき、曲がるたびに重々しい雰囲気を感じ始めた。黒猫が歩を止めたのは、神社の前だった。人の話し声が聞こえる。それも大勢だ。こんなところ、どうして人が集まっているのだろうか。入口

の横の石柱に、神社の名前が彫られていたようだが、相当古いのか、壊れていて読めなかった。

私はこの神社に来た覚えがない。そもそも、近くにこんな神社があるとは思っていなかった。黒猫はこちらを一瞥し、鳥居をくぐっていった。私もそれに倣って、境内に入った。

本殿の周りに、黒い服をまとった人たちと、さまざまな種類の猫がいた。井戸端会議を楽しそうにしている者もいれば、階段に座つくろいでいる者もいる。明らかに日常とは違う、異様な光景を目の当たりにした。精神が削れる様子を体現するように、心臓が萎縮する。ここに来てはいけなかったのだろうか、しかし、もう遅いということも悟った。

丁度いいことに、魔女の仮装をしていたので、自分だけ目立つといったことはなさそうだ。もつとも、周りの人が皆仮装をしているとは思えないのだが。

そう考えているうちに、前の方で大きな声が聞こえた。三毛猫だった。

「やあクロ、ずいぶん遅かったじゃないか」

「主役は遅れてやってくるもんさ」

「いつから主役になったんだい？」

「生まれた時からさ。僕の人生の主役はずっと僕だ」
クロと呼ばれた黒猫は軽快な口ぶりでおどけたが、
三毛猫の方は困った様子で口を結び、小さく「六十点」と呟いた。黒猫は不服そうだ。

一息ついて、三毛猫が話を切り出す。

「その後ろの人がクロの主人かい？」

しれっと、黒猫が肯く。三毛猫はこちらをちらりと見ると、「そうかい、そうかい」と何かを噛みしめるように笑った。黒猫はそれに構わず話す。

「どうだ、言っただろう。まだ魔女はいるんだって」

「へえ、こりゃあ参った。まさか本当に見つけてくるなんてな。どこにいたんだい？」

「商店街の大通りさ。一般人のお祭り騒ぎに紛れてた」
二匹の猫は、私を置いてけぼりにして話を進めている。とりあえず今の状況を聞きたいが、肝心の黒猫は喋っているし、他に訊けるような人はいない。まごまごしていると、不意に声をかけられた。振り向くと、セレブのパーティーにいるような、決して、さびれた神社には釣り合わない、赤いワンピースと黒のショールを着た女性がいた。

「あら、お困りの様子で。黒猫のご主人かしら」

「ええ、そうなんです。ここに来るのは初めてで——」
「そうなの。ずいぶん不親切な猫なのね。それなら私が教えてあげるわ」

彼女はそう言うのと、優しく語りかけるように、ゆっくりと話し始めた。

時代は数十年前にさかのぼる。日本でのハロウィーンは、とあるテーマパークでイベントが行われたことが始まりだ。そこから、ハロウィーンの認識が世間に浸透していった。

魔女たちは、その身分を隠して生きていた。私たちは魔女の一族だと代々伝えられていったが、それを実感できる要素がなかったのだ。しかし、魔女の存在が浸透したことで、かろうじてハロウィーンの日だけは本来の魔女の服装をして外に出ることで、実感できるようになったという。

そこで、この日に、魔女たちで秘密裏に集会を開き、交流しようと始められたのだ。この集会は、同士を採し、結託するのも目的のようである。

「というわけなの」と締めくくり、彼女は一息ついた。
「なるほど。それならどうして、猫がついてきてるんですか？」

「猫は魔女の補佐役なの。それに、猫同士のつながりも強くてね。情報がすぐ回ってくる」

彼女は最後に、「それでも、新しい魔女が見つかるなんて十年ぶりくらいね」と付け加えた。何かを悟っているかのように微笑んでいる。そうしているうちに、黒猫と三毛猫がこちらへ歩いてきた。

「あら、ご主人。いつの間にお知り合いに」と三毛猫が言う。

「ええ、ついさつきね。クロさん、あなた、この子になんにも教えてないの？」

黒猫はうつむき加減に「はい」と呟いた。

「そういうところはちゃんとしなさいよ」と戒めると、彼女は私の方に向いて、「それじゃあ、私たちはこの辺で」と言って去っていった。

黒猫と二人きりになったところで、黒猫が苦々しく口を開く。

「——それで、大まかな話はあの人から聞いたんだろ

う」

「そうね。だいぶ話してもらった。あなたからは何かあるの？」

「そうだな。——僕はあんたが魔女じゃないって知っている」

私はただうなずいた。

「それでだ、今日だけでいい。魔女のふりをしてくれないか」

黒猫は、どうかこの通り、と伸びながら座った。

「これからあくびでもするの？」と訊くと、黒猫はムッとして「精一杯の土下座だ」と答えた。

日はもうそろそろ姿を隠しきる。まだ空に光はあるといえど、もう夜だ。帰ろうとしても、道は覚えていない。

その後も何人かと駄弁りあい、一人佇んだりして、時間は過ぎた。

黒猫が、「どうだい、もうそろそろ慣れてきただろう」と話しかけてきた。

「ずいぶんね。自分でも驚いてる」

「それが僕たちの常識さ。あんたの常識は変えられた

かい」

「とつくに変わってるよ。そうでもない今頃怖くて失神してるね」

「冗談もうまくなってきたもんだ」

「点数をつけるなら何点ぐらいかな？」

「そうだな、——五十点だな」

「あなたより低いのか？心外だね」

「弟子にでもしようか。眷属兼師匠というのも面白いだろう？」

「遠慮しとくわ。むしろ私が師匠になってもいいけど」

そんな話をしているうちに、一匹の猫が近づいてきた。夜の猫は、体のほとんどがもう見えなくなっている。

「おい、クロ。聞いたぞ、新しい魔女を見つけたんだってな」

「ああ、そうさ。どうかしたか？」

「いやいや、ちょっと気になってね。それは本当に魔女なのか？って」

「そうに決まってるだろ。見て分からないのか？」

「へえ、見ただけで分かるなんて、お前の目はすごい

なあ」

「もつと褒めてくれていいんだぞ」

猫は鼻で笑うと、私の方を向いた。

「俺はすごいから分かるけどな、あんたには魔力がない。残念ながら、嘘つきはここにいない資格なんてないぞ」

「へえ、見ただけで分かるなんて、お前の目はすごいなあ」

「もつと褒めてくれていいんだぞ」

私は、何も言えないで立っていた。言い合う二匹の猫をずっと見ていた。

「——クロ、帰ろう」

「あ？あんたが正真正銘の魔女だって分からせないといけないんだよ」

「そんなの後だってできるでしょ。今日はもうおいとましよう」

「後にはできないんだ」

「いいから」と言いながら、私は黒猫を両手で掴んだ。黒猫はじたばたと暴れているが、逃げられることはない。

「それでは、またの機会に」と言って、両手で黒猫を

持ったまま鳥居をくぐり抜けた。

帰り道は、また黒猫の先導だ。街灯の下を心持ち急いで歩く。途中で、ぽつりと、黒猫が呟いた。

「今日はありがとな」

「どういたしまして。最後の猫には多分ばれてるけど」

「一匹くらいならいいさ。多少弁が立つのが厄介だが」

「それであなたは大丈夫なの？」

「分らない。来年集まるころには、噂が皆に広まってる、最悪追い出される」

「——そう。ごめんなさい」

「いいさ、いいさ。それに、僕を飼ってくれるんだろう？」

えっ、と声が漏れる。

「そりゃあ、帰ろうって言ったら、家に帰るよなあ。それに僕がついて帰るとなったら、僕はあんたの家に行くよなあ。」

黒猫は少しためて、大声で「そりゃあ、僕はそこに居座るしかないよなあ」と言った。なんて傲慢なやつだ。

「しよがないなあ」と言うと、黒猫は口を横に大き

く広げ、にんまりと笑った。

その日は、黒猫を持ち帰り、なつかれてしまったから飼いたいと説得した。両親は渋々了承してくれ、私が世話役になった。もちろんペット用品は何もなかったのも、明日買いに行くことにして、今日は私の部屋で一緒に寝た。

説得できて良かった、と言うと、黒猫は、ありがとな、と答えた。

次の日の朝、十一月の始まり。日の光が暖かく照る。起きて伸びをすると、それに合わせて黒猫が鳴く。

「おはよう、クロ」

にゃーん、と返事が来る。——それだけだ。

「あれ？どうしたの？」

にゃん。黒猫は優雅に歩き出す。まるで、人語を喋らないことが常識であるかのように。そこで、たった一日だけで、猫が喋るのが当たり前に変わっていたことに気づいた。夢のようではあるが、昨日の出来事が現実であることは、目の前にいる黒猫が証明している。ふっと、息だけの笑いが出た。

「そうだったなあ」と独り言を呟く。

「常識に囚われてちゃあいけないな」

にゃーん、と黒猫が鳴く。また来年のハロウィーン
の日に、突然喋ったりしてくれないだろうか。そんな
ことを思いながら、私は日常へと戻っていった。